

正月の数日を天草で過ごした。不知火海を挟んで、水俣から望見できる島々に行ってみた。温泉の魅力もさることながら、天草版と呼ばれる「キリシタン出版」がどのような場所か、確かめたかったのだ。その事跡を伝える「天草コレジヨ館」は海を間近にした場所にあり、湾の向こうは天草灘、さらに先は東シナ海が広がる。印刷機は、天正遣欧使節がヨーロッパから持ち帰ったグーテンベルク式である。

バスと新幹線を乗り継いで、一日で帰京する予定を立てていた。帰京ラッシュと重なる日曜日のため、博多からの指定席

が取りにくく、しかたなしにグリーン車を、妻とは離れた席で予約してある。乗車して奇妙な感じがした。乗務員や警備員がずいぶんと多い。最前列の席だったので、デッキのようすがよく見える。耳に無線機

のレシーバーを装着したスーツがたの男性ふたりと巡査もいる。胸のバッジには「SP」とあった。セキユリティ・ポリスがいるのだからこの車輛には「要人」がいることになる。

トイレに行きながら、車輛を通り抜けてみると、中央部の少なくとも四列ほどが背広の男たちで占められている。要人は、秘書やSPに取り囲まれて着座しているのだろう。男性乗務員や警備員が、不審な行動に対してのセンサーを働かせながら通路を神妙に行き交う。女性乗務員も、おしほり配布やゴミ回収など

の用事をたずさえて、行ったり来たりする。その日の「のぞみ40号」自由席はたいへんな混雑で、立つしかない乗客がグリーン車のデッキに来ようとす。だが、乗務員やSPは規則を盾に彼らを引き返させる。

観察していると、停車駅でデッキのSPと巡查が交代していくのに気づく。列車が県をまたぐごとに、警備の管轄が替わる。博多駅からは福岡県警、広島駅で広島県警、姫路駅からは兵庫県警が乗りこみ、新大阪で大阪府警にバトンタッチし、京都駅では京都府警が引き継ぐ。要人の前後左右を固めているのは、おそ

透明な要人警護

らく専従の警視庁SPだろう。専従SPのトックラしきひとが、交代が行なわれるたびにデッキを訪ね、各府県の警官にあいさつを繰り返す。JRのがわは、西日本から東海へと管轄が移行していく。

数か月前、SPが新幹線で容疑者を護送する場面のある映画『藁の盾』（三池崇史監督、二〇三年）を観た。じっさいのSPは、映画のようだった。右腰後部の背広の裾がふくらんでいる。拳銃を吊るしているのだろう。兵庫県警と大阪府警のSPのひとりずつが女性だった。黒い上下のパンツスーツに白いブラウス、ローヒールの靴で、腰にはやはり拳銃である。女性

SPが印象的だった『藁の盾』をふたたび思いだす。

SPを視野の中心に据えながら周辺を眺める。意外と、ひとびとはSPに気づかない。黒い背広でデッキに立っているすがたに、鉄道関係者だと思わらしく、乗り換え番線やトイレの場所をSPに聞く客が絶えない。国家という巨大なシステム、その一端が、新幹線での要人警護に可視化されている。だが、警察どうしやJRとの連繋が円滑であればあるほど、要人警護なる行為は、市民の眼から透明になっていく。

鈴木一誌

一行は名古屋で下車していった。新聞報道では、翌日「首相と七人の閣僚が伊勢神宮を参拝」とあり、うちひとりが名古屋で前泊したのかもしれない。四列もの座席を押さえるにはどれほど前から予定を立てるのか、警備状況をふくめて多くが〈秘密〉なのだろう。

天正遣欧使節の四少年は、往還に八年半を要した。治世者は信長から秀吉に代わっていった。キリシタン出版には苦労がともなう。活字の材料や紙の調達はどうしたのだろう。伝道のためだったとはいえ、結果として、当時の日本語を伝える一級の資料となった。治世者は替わっても、国家は駆動しつづける。〈世界史〉を見据えてと言えば大袈裟だが、長い目からの〈やるべきこと〉を探りたい。

（すずき・ひとし／ブック・デザイナー、題字デザインも筆者）